

Title	中世英文学におけるコミック・リリーフ： 『サー・ガウエインと緑の騎士』のフットボールの場合
Sub Title	Comif Relief in medieval English literature : the case of the football in Sir Gawain and the green knight
Author	高宮, 利行(Takamiya, Toshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2005
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.88, (2005. 6) ,p.127(184)- 131(180)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2004年度藝文学会シンポジウム：文学における"遊び"
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00880001-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世英文学におけるコミック・リリーフ

——『サー・ガウェインと緑の騎士』のフットボールの場合

高宮 利行

中世英文学の傑作をひとつだけ挙げよと言われれば、わたしは躊躇なく14世紀後半に書かれた騎士ロマンス『サー・ガウェインと緑の騎士』を挙げたい。なぜ有名なチョーサーの『カンタベリー物語』でないかといえば、あれは個々の作品の出来もよく、登場人物とそれぞれが話す物語がうまく連携しているといえるが、いかんせん未完に終わっているのである。また15世紀後半にサー・トマス・マロリーが書いた『アーサー王の死』については、現代人でも面白く読めるし、19世紀以降の再話に多大の影響を与えた点は認めるにしても、所詮はフランス語の散文アーサー王物語を英語に翻案して、脈絡をつけたという印象はぬぐいがたい。

そこへ行くと、作者不詳で写本がひとつしか現存しない『サー・ガウェインと緑の騎士』は、物語の面白さといい、まっすぐ大団円に進む構造といい、難解な頭韻詩を操る言語感覚といい、文句のつけようがない。中世ヨーロッパ文学の世界では、作品執筆に関しては材源 (matter)、扱い (manner)、意味付け (sense) の三つが重視されたが、とくに扱い方、要するに目の前にある材料をいかに料理して味付けするかに関しては、この作品の右に出る作品は少ないだろう。

アーサー王伝説ではフランスが本場ということもあり、中世仏文学者はケルト伝説に材をとったこの作品をほとんど知らなかった。そのため『週刊朝日百科 世界の文学』のアーサー王文学の特集でも、企画段階では小さなスペースしか与えられなかった。しかし、折から出版されたばかりの仏語訳の本作品を読んだ編集責任者が、この作品の偉大さを知り、急ぎ紙幅を拡大したほどである。

さて、『サー・ガウェインと緑の騎士』は4部からなり、次のように展開

する。

第1部 若きアーサー王はクリスマスの大宴会で、いつもの習慣どおり、何か変わったことが起きるまでは食事に手をつけないと宣言する。すると、すぐさま、全身緑色で緑の馬に乗った大きな騎士が乱入して、アーサーに面会を求める。片手に大きな斧、もう一つの手にはヒイラギの枝をもって、「この斧で俺の首を斬ろうとするほど勇気がある騎士がいれば、斬るがよい。ただし、一年後にお返しの一撃を受ける気があるならば」と首斬りゲームの挑戦をする。他の騎士たちが尻込みするので、アーサーは自ら挑戦を受けようとするが、そこにガウェインが飛び出して挑戦を受ける。彼は緑の騎士の首を斬り落すが、騎士は自分の首を拾い上げると、一年たったら緑の礼拝堂まで来るようにとガウェインに警告し、首を小脇に抱えて馬で走り去る。

第2部 月日は流れてやがて一年という時、ガウェインは不思議な礼拝堂を探しに出かける。厳しい北ウェールズの自然を旅して、ウィラルの荒野にたどり着く。疲れきって聖母マリアに祈ると、眼前に壮大な城が現れる。この城に一夜の宿を乞い、城主と話をすうち、緑の礼拝堂が城からほんの少し離れたところにあることを知る。広間には美しい城主夫人と醜い老婆がいる。城主はガウェインに、約束は三日後だから、その日まで逗留するように誘い、憂さ晴らしのゲームをしようという。城主は毎朝狩に出かけ、ガウェインは城主夫人と城に残る。そして毎夜の宴会で、互いの獲物を交換しようという趣向だった。

第3部 狩猟は中世の狩人たちが好む、儀礼的な手続きを踏んで行われる。一方、城主夫人は毎朝、ベッドにいるガウェインを訪れて、言葉巧みに誘惑する。だがガウェインは慇懃に、言葉巧みに夫人の接近を避ける。こうして、それぞれの一日の終わりに、約束どおり獲物が交換される。初日の夜、ガウェインは鹿肉をも

らう代わりに、夫人からもらった口付けを一度城主に与える。こんな素晴らしいものをどこで入手したかと問う城主に、ガウエインは約束に入っていないと、答えることを拒否する。二日目は野猪に対して二つの口付けを与える。そして三日目、夫人は身に着けていればどんな危害からも守ってくれるという魔法の緑の帯と三つの口付けをガウエインに与える。ところが、彼は狐の皮と交換に、城主には三つの口付けだけを与え、約束を破って帯を自分のものとしてしまう。

第4部 翌朝早く、ガウエインは城主の召使一人を連れて緑の礼拝堂に向かう。その途中、召使は緑の騎士の恐ろしい強さについて警告し、彼にこのまま引き返すように勧める。ガウエインがこれを拒否し、単身で荒涼たる礼拝堂に進もうとした時、斧を研ぐ音を聞き、相手の用意が十分であることを知る。ガウエインは一撃を受けるため頭を下げるが、恐怖のあまり二度にわたって首を引っ込めてしまう。ガウエインの尻込みを責めた騎士は、三度目に、彼の首にかすり傷を与える。その後騎士は、自分こそガウエインが投宿した城の主であり、妻が自分の指示で誘惑したこと、二度首への一撃をやり過ぎたのは口付けへの代償であり、最後のかすり傷は、取引条件を破って彼が所有した魔法の帯に対する報いだったと説明する。恥じ入ったガウエインは帯を返そうとするが、そのまま所持して不面目の印に着用するように言われる。緑の騎士は、名前をベルシラック・ド・オーデゼールといい、城にいた醜女モルガン・ル・フェイが円卓騎士団の力を試しグエネヴィア王妃を震え上がらせるために、この冒険を仕組んだのだと説明する。ガウエインはアーサー王の宮廷に戻り、恥じ入って冒険談を披露する。王は円卓の騎士全員に、彼の冒険と贖罪の記念として、緑の飾り帯を身に着けるように命じた。

このように、クリスマスから翌年のクリスマスへと、四季が円環状に展開する中で、ガウエインの冒険が続く。聴衆が胸躍らせて物語に耳を傾ける姿が目につかぶほどだが、語り手は随所で詩人と聴衆の間に入って、両者を有機的に結びつけている。

第1部で、これから宴会が始まろうとする広間に緑づくめの騎士が入って来る場面では、そこにいる騎士や貴婦人だけでなく、話に引き込まれた聴衆も、そのおぞましい姿に恐れおののいたに違いない。首斬りゲームが持ち出され、最後にガウエインが騎士の首を刎ねた時、そこにいた宮廷人たちも聴衆もほっとしただろう。首が床に転がったのだから、これで二度と生き返るまいと思うのは当然だ。

美しい頭部が首筋から切れて地面に落ち、前方へ転げていったので、多くの人々がそれを足で蹴飛ばした。血が体から吹き出て、緑の地にほのかに輝いた。(426-428行)

ここは恐怖と緊張から解き放たれて、安堵した人々が自分の前に転がってきた騎士の首を蹴鞠のように扱った場面である。歓声が上がったかもしれない。それは話を聞いていた聴衆とて同じであっただろう。一方、赤い鮮血が地の緑に映えたというのは、緑の騎士が持ってきたヒイラギの枝と呼応する。常緑の葉にクリスマスの時に赤い実をつけるこのヒイラギは、キリストの血が緑の聖衣に付着した受難を表すとの説もある。

しかしこの場面でわたしが注目するのは、人々がほっとして騎士の首を使ってフットボールに興じたという描写である。これこそコミック・リリーフ、つまり悲劇的な場面に挟まれる息抜きの場面といえよう。F. P. マグーン、Jr.というハーヴァード大学の英語学者は、この場面に注目した最初の人物で、学術書『フットボールの社会史』（忍足欣四郎訳、岩波新書、1985）において、英語による最も早いフットボールへの言及であると述べている。しかし、この場面が緊張感を強いる二つのエピソードの間に置かれたコミック・リリーフとは論じていない。

首を斬られて、蹴鞠に用いられたにもかかわらず、緑の騎士は不死身で、次の場面では首をつかむと、赤い両目が人々を睨みつける。それだけではない。赤い舌が「ガウェイン、一年後を忘れるなよ」と言い放つと、宮廷人もまた聴衆も、これはしまった、奴は不死身だったのかと、恐ろしさに再び縮みあがるというものだ。この効果をあげるのに、フットボールをやったという趣向は注目されてよいだろう。ちなみにこの場面を、ショーン・コネリー扮する緑の騎士を登場させて映画化した『勇者の剣』（1981）では、首斬りの場面はあっても、それを足蹴にしたところは描かれていない。現代の倫理感覚には合わないからだろう。

こういったコミック・リリーフは、シェイクスピアの『マクベス』における門番の場面や、『ハムレット』の墓掘りの場面でも用いられている。いずれも下品な門番と墓掘り人夫が、汚い下層の英語を使いながらも、聞いている者をはっとさせる警句を吐く場面である。両作品ともに死と隣り合わせに生きていた17世紀初めの悲劇だ。日曜日、テムズ川を船で渡ってグローブ座で上演される『マクベス』を見にきた観客も、芝居小屋に入る前には、犬をけしかけて熊をいじめ殺す見世物や、犯罪人の処刑場で足を止めたかもしれない。これほど、中世でも近世でもむごたらしい死を平気で見世物にする趣向が当たり前だった。そしてこれがコミック・リリーフとして、文学に遊びをもたらしたのだといえよう。